

ボストン大学公衆衛生大学院留学報告書

2017-2018年度グローバル補助金奨学生 舟越 優



- 留学先 ボストン大学公衆衛生大学院修士課程
- スポンサークラブ
東京立川こぶしロータリークラブ
- ホストクラブ Salem Rotary Club

1. 履修内容, 学校生活の報告

みなさま, ご無沙汰しております. 東京では桜も散ったと伺っておりますが, ボストンは4月に入っても雪が降る日が続いており, みな春を待ちわびています.

年が明けてからの春学期は, 社会疫学, 母子保健の疫学について深く学ぶための基礎として, 生物統計学, 疫学を基礎から学んでいます. 具体的には, SB822 Quantitative Methods for Program Evaluation, EP770 Concepts and Methods in Epidemiology, BS723 Introduction to Statistical Computing, BS722 Design and Conduct of Clinical Trialsの4科目です. また次回以降授業の内容についてはご紹介できればと思いますが, 4科目のひとつ, SB822では, 人びとの健康を改善するためのプログラムを立案, 実施する際, 本当にプログラムに効果があるかを知ることがいかに難しいか, そしてしばしば効果の乏しい施策に漫然と予算や人員が割かれてしまっている現状と必要な考え方や手法を学んでいます. 費用対効果の高い施策を策定, 実施, そして改善していくためには



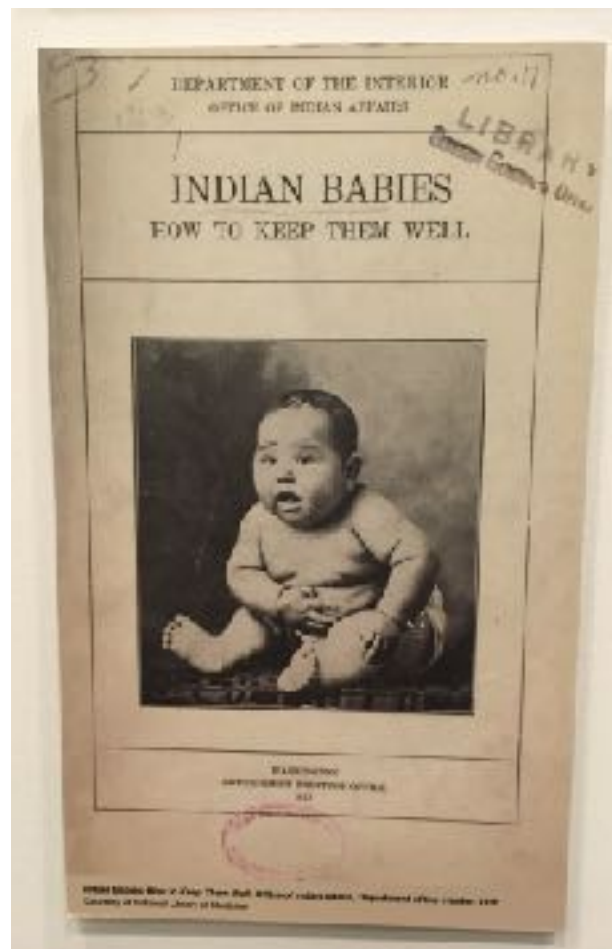
アトランタでのセミナーで, 1970年代に天然痘の根絶を率い, CDC長官, Carter Centerエグゼクティブ・ディレクターなどを歴任したDr. Foegeと.

理論に基づいた評価が必要です。最近「エビデンスに基づく」という言葉が、医療分野だけでなく、教育分野や公共政策の分野でも多く聞かれるようになってきました。母子保健の分野でも、理論上は効果的だと思われていたり、他国で有効であった施策が、いざ自国で実施してみると効果をあげられないことは珍しくありません。将来研究をもとにして、母子保健改善のための政策立案に携わるにあたって間違いなく役立つ内容なので、しっかりと学び取っていただければと考えています。

その他の科目も、各分野における基礎とは言っても決して平易な内容ではなく、むしろこれまで病院勤務の中で行っていた臨床研究では理解せずに流してしまっていた、研究デザインにおける原理原則を根本から理解し直し、またしばしば誤解していた考えを訂正することにもなっています。課題や試験も多いのですが、米国での生活や学びにも慣れてきたせいも、秋学期までよりはスムーズに授業の予習復習が進められるようになってきました。

5月中旬には春学期が終了し、長い夏休みとなります。多くの学生はその間に卒業要件の一つであるPracticumと呼ばれる実地研修を行います。

公衆衛生大学院の卒業生のごく一部は博士課程を中心としたアカデミアに残りますが、大多数は官公庁の保健分野、国際機関、医療施設、健康課題へと取り組むNPOやNGOなどに就職し、実務を行います。そのため米国の公衆衛生大学院の多くでは、学生の志向するキャリアに合わせた機関で200時間前後の実務経験を積むことが求められており、これをBUではPracticumと称しています。ボストンは医療に関連する団体が非常に多いため、学生が行うPracticumの内容も多彩です。私自身は、現在学んでいる疫学や生物統計学、プログラム評価などの知見を活かせるよう、マサチューセッツ州やボストン市の、東京都でいう福祉保健局や保健所に当たる部署での疫学調査や介入プログラムの評価、ボストン小児病院での質改善プログラムなどを中心に応募しています。以前他の大学院に留学していた方から伺っていたとおり、多くの場合は応募書類を送付しても返答はなく、まして面接にはほとんど呼ばれません。かなり苦戦してはいますが、充実した経験ができるよう粘り強く機会を求めていこうと思っています。



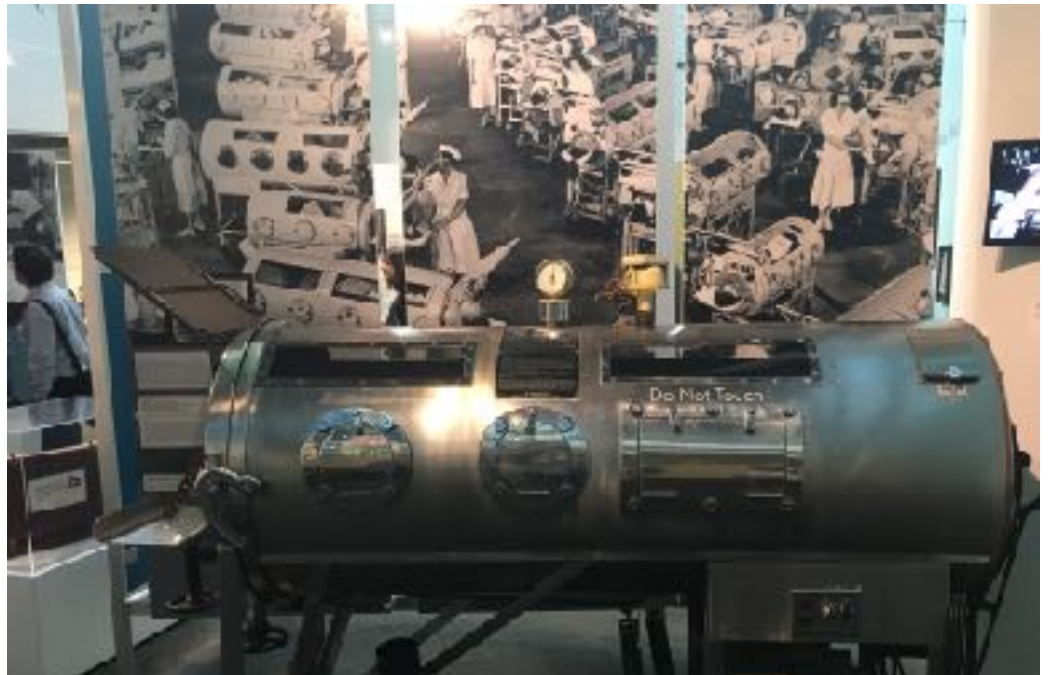
ジョージア州立大学で
CDC, NIHとの協力で開
かれていたHealth
Equity (公正な健康)
に関する展示の一コマ。

2. ロータリアンとの関わりについて

例会が開かれている火曜日が今学期も終日授業となってしまう、残念ながら現時点で訪問ができておりません。Practicumの日程が決まり次第、夏季休暇中または秋学期開始直前でのセーラム訪問ができればと考えております。

3. 重点分野に関して感じたこと、履修内容との接点

写真でもご紹介していますが、3月末にジョージア州立大学で開催されたGlobal Health (グローバル・ヘルス) とHealth Disparities (健康格差) をテーマにしたセミナーに参加する機会を得ました。世界50カ国以上から米国へ留学してきている学生約70人と、Emory



CDCで「鉄の肺」の実物を初めて目にしました。1900年代、ポリオ大流行に際して使用され多くの人命を救った機械です。

大学や米国疾病予防管理センター (CDC) の研究者とのディスカッション、学生同士での経験の共有、CDC訪問など大変濃密な4日間を過ごすことができました。また、セミナー終了後には毎夜参加者同士連れ立ってパブに繰り出し、各々の関心や米国での経験を語り合いました。アジアやアフリカからの留学生からは、医療システムが確立されていない場所で人びとの健康を守り改善する難しさとやりがいについて多様な経験を聞くことができ、大いに刺激を受けました。また、日本での健康格差、児童虐待の相談件数の増加、子どもの相対的貧困率の高さなどの現状を話題にすると、みな漠然と抱いている日本のイメージとの違いに大変驚いていました。もっともっと日本のことを、歴史も含めて学び、伝え、議論する力を身に着けなくてはと思いを新たにしました。

留学機間も気づけば残り一年と少しとなりました。今後この経験をどのように生かし、そして社会へ還元していけるのか、まずは目の前の経験から最大限学びつつも考えてまいります。新年度で環境が変わられた方もいらっしゃるかと存じますが、どうぞみなさま体調にはお気をつけください。今後ともご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願いいたします。